

紀行エッセイ・宮崎汎会員の見た世界

第1部映画編・第7話

映画 北ホテル (オテル・デュ・ノール) パリ

「北ホテル」は1938年にフランスで製作された映画である。テレビで放映されたものを視聴したのであるが、最初の印象はモノトーンの暗いイメージで湿っぽい映画だなと感じた。

ストーリーは一組の男女がホテルに宿泊する。互いに孤独な二人は心中を図るつもりであった。男が女を撃った。呆然とする男に駆け付けた隣室の男が逃げろとせかす。幸い命を取り留めた女は、



自分を撃って逃げた男と再び人生をやり直そうとするが、男は罪悪感でなかなか女の愛情を受け入れられないが、遂にもう一度やり直してみようと決意する。男を逃がした隣室の彼は撃たれた女に惹かれているが訳ありで、にぎやかなお祭り騒ぎの最中撃たれて死んでしまう。二人はそれを知らずに旅立つといった内容であった。

映画はモノトーンでパリのうらぶれた街の雰囲気がよく醸し出され、ちょっと重たいながらじんわりと記憶に残る映像であった。運河のほとりにある小さなホテルが舞台で、パリの華やかな表通りとはまったく違う表情を見せる生活臭の漂う風景に、いつかチャンスがあれば北ホテルの有る運河のほとりを歩いてみたいものだとぼんやり考えていた。

運河のほとりにある北ホテル

仕事で何度目かのパリにやってきた。明日は週末という日に一緒したメンバーの一人である某化学会社のトップから「明日予定が無ければ私に付き合ってくださいませんか」といわれ承知した。翌朝食事を一緒しながら彼が問わず語りに話しだした。「私の兄は数年前まである企業の経営者でした。子供のころから絵が好きで将来画家になりたいといつも言っていました。ところが家庭の事情で働かねばならなくなり、抱き続けてきた画家への夢を断念し就職いたしました。

65歳で実業界を引退し好きな絵を描く日々が始まり、描いた絵が外務大臣賞やNHK会長賞を受賞し本人も家族も大層喜んだものです。

70歳を迎え、長年の念願であったパリに半年ほど滞在し、パリの様々な風景をスケッチしました。



水を抜いた運河

多分夢見心地の日々だったのでしょう。普段は気難しい兄ですが、パリでの生活を私に語る楽し気な表情は忘れられません。その時滞在したホテルが若い時に見て感動した映画の“北ホテル”でした。サンマルタン運河のほとりの小さなホテルだそうです。私はパリには仕事で何度も来ていますが、兄の愛した運河の有る風景をまだ見てないので、今回が
いいチャンスと思いぜひ見ておきたいと思った次第です」

こうしてこの方のお供で地図を頼りに宿泊しているヴァンドーム広場に近いホテルムーリスを後にしたのである。

サンマルタン運河は、かつて物資を運ぶ水路としての重要な役割を持っていたのであるが、今はうらぶれ物悲しい風情を見せ、道行く人も生活臭をそこはかたく漂わせている。シャンゼリーゼの華やかな通りをそぞろ歩きしている人たちとは人種が違うような気がした。運河沿いをしばらく進むと真ん中が高く膨らんだ鉄の橋がかかっているところへ出た。



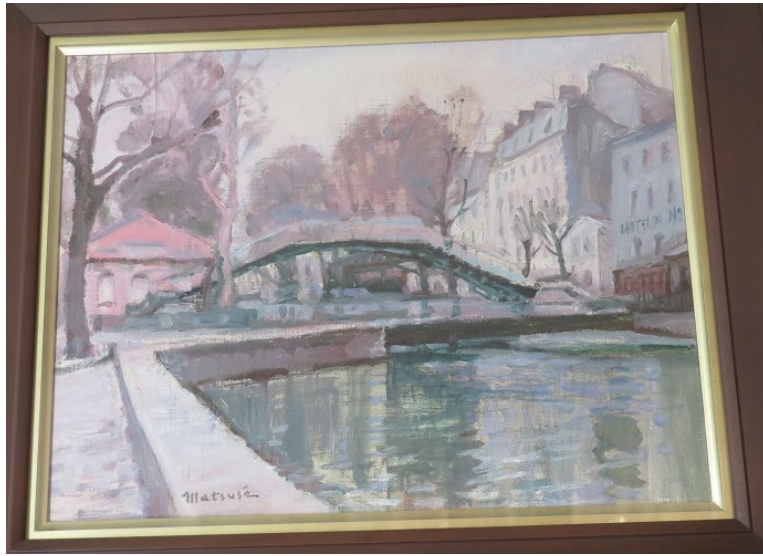
北ホテル前の運河にかかる跨線橋

彼はちょっと上ずった声で振り返りながら「ああここだ！あれが北ホテルだよ」と指さした。北ホテルは意外に小さく4階建ての白い建物だ。今もホテルなのか建物の正面に大きく「HOTEL DU NORD」と書いてある。古いフランス映画であるが、テレビの画面で見た雰囲気そのままの景色が目の前にある。映画のあの一寸うらぶれた暗いイメージが今も周りに漂っている。

1983年に訪れた当時サンマルタン運河は埋め立てるのか、それとも浚渫なのか水を抜いていて相当深い空堀の状態にあった。運河にかかる鉄の跨線橋は物資を運ぶ運搬船を通すためであろう、いずれも橋の中央部分が高く膨らみ太鼓橋の様相をしている。

二人とも何もしゃべらずにしばらくたたずんでいた。黙って並んで歩きながらサンドニ門まで戻ってカフェに入りちょっと重苦しい気持ちをほぐした。彼は「付き合ってくれてありがとう」といって深々と頭を下げた。 (1981年)

後日談) 帰国して挨拶のため霞が関ビルにある本社を訪ねた。強く印象に残った北ホテルについての話をしながら「〇〇さん記念にお兄さんをお願いしてあの運河と北ホテルを入れた絵を描いていただけませんか？」と不躰にお願いした。一瞬逡巡したが「頼んでみましょう」といわれた。



北ホテルを描いた記念の絵画

2年の年月が流れた。電話がかかってきて「やっと描いてくれました。取りに来ませんか」という。とっさにお問い合わせのことをすっかり忘れてしまい一瞬何のことかと思った。絵を見るなり想像した通りの構図で早速自分の職場の壁に飾った。職場や来客の幾人かが絵に目をとめる。その都度この絵のエピソードを話した。何人かが絵を誉めながら忠告してくれた。「絵をくれ」というのは買い取るならいいが、友人同士ならいざ知らず。公の賞を取られた方に言うのは禁句に近い。敢えて

言うならば非常識だというのだった。すぐに絵を下さった兄君に非礼な願いをしたお詫びと改めて礼状をしたためた。折り返し絵を大切に楽しんでくださいと律儀な字で丁寧な手紙をいただいた。その絵は今も大切な思い出として陋屋に飾ってある。そしてふと絵を見るたびに北ホテルのたずまいやエピソード語ってくれた、今は亡き彼の人を思い出すのである。 (1983年)